

独立行政法人 国際協力機構

中国国際センター

平成18年度 活動レポート



JICA LIBRARY

1186232 [3]

中国七
J R

平成19年

平成18年度 JICA中国活動レポート

目次

—はじめに—	1
第1部 各事業の活動報告	
1. 研修員受入事業	2
2. 青年招へい事業	4
3. 海外ボランティア事業	6
4. 草の根技術協力事業	8
5. 開発教育支援・市民参加協力推進事業	10
6. 大学との連携協力	13
第2部 図表と写真で見るJICA中国10年間の事業実績	
1. 研修員受入事業実績	15
2. 青年招へい事業実績	16
3. 海外ボランティア事業実績	17
4. 草の根技術協力事業実績	18
5. 開発教育支援・市民参加協力推進事業実績	19
第3部 実績・参考資料	
1. 平成18年度事業実績	24
2. 参考資料	58

表紙写真「アフリカからのJICA研修員による広島女学院高等学校訪問・交流」



1186232 [3]

はじめに

この冊子は、独立行政法人 国際協力機構 中国国際センター（JICA中国）の平成18年度の事業概要をまとめたものです。また、JICA中国が業務を開始して以来、今年で10周年を迎えることができましたので、これを記念して、本冊子には10年間の事業実績も併せて掲載しています。

この10年間、JICA中国は、中国地方に位置する鳥取、島根、岡山、広島、山口の5県において、地方自治体や大学、団体等と連携して、開発途上国からの技術研修員を受け入れる研修員受入事業や、青年招へい事業（平成19年度から青年研修事業に改編）を展開してきました。また、市民参加協力事業としては、草の根技術協力事業や出前講座、教師海外研修、高校生国際協力体験プログラム等の開発教育支援事業などを実施し、海外ボランティア事業として青年海外協力隊やシニア海外ボランティアなどの派遣に力を入れてきました。さらに、国際協力に関する広報や啓発活動も行っていました。

広島県に位置するJICAの国内機関として、JICA中国は、広島の被爆体験や戦後の復興経験を踏まえ「平和構築・復興支援分野」における国際協力事業に力を入れています。広島大学等の連携協力に基づいた「初等・中等教育」もJICA中国が積極的に取り組んでいる分野です。これらの分野に関し、平成18年度にアフリカ向けの地域別研修コース「平和構築としてのガバナンス能力強化」を実施、教育分野ではアフリカを対象とした「研究と対話による自立的な基礎教育開発の促進」コースなどの研修を行ってきました。このようにして受け入れた研修員は平成18年度で289名、この10年間では2,579名にも上りました。

開発途上国の若者を日本に招き、それぞれの国で必要とされる分野の研修を通じ、将来の国づくりを担う人材を育てることを目的とする青年招へい事業では、ベトナム、アフガニスタン、太平洋の国々などから合計9グループを受け入れ、帰国青年は日本と自国の橋渡し役としての活躍が期待されています。

草の根技術協力事業は前年度からの継続案件も含め、11件実施しました。国際協力出前講座は171件（参加者総数は14,964名）実施し、小・中学生をはじめ、高校生、大学生、そして広く市民の方々への国際理解の浸透や地域の国際化への貢献に努めてまいりました。教師海外研修や高校生国際協力体験プログラムも、参加した方々から好評をいただいております。

海外ボランティア事業に関しては、平成18年度、中国地方5県から89名のボランティアを開発途上国に派遣しました。その数も、この10年間では約900名となり、市民の国際協力参加への熱い思いを感じずにはられません。

このようにJICA中国の事業は、中国地方の自治体、NGOや大学等のさまざまな団体に支えられながら、そして市民の方々の温かいご理解、ご支援ならびにご参加があって成り立っています。

平成20年10月に、JICAは政府開発援助（ODA）の一元的な実施機関として新しく生まれ変わることが予定されています。今後とも、JICA中国は、中国地方の特徴を活かした国際協力事業の実施にさらに取り組んでまいりたいと思います。JICA中国のこれからの活動に一層のご指導、ご鞭撻を賜りますようお願いいたします。

平成19年6月

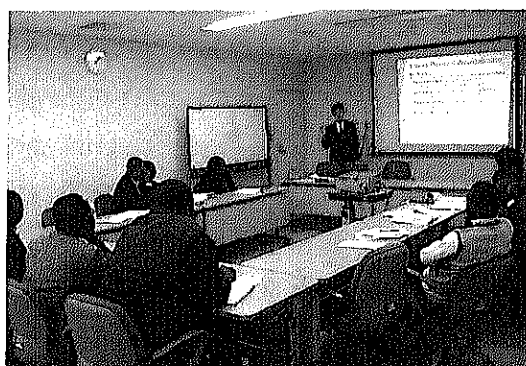
独立行政法人 国際協力機構
中国国際センター
所長 生井年緒

第1部 各事業の活動報告

1. 研修員受入事業

JICA中国は、開発途上国のそれぞれの専門分野で実務に携わっている行政官、技術者、研究者などを受入れて、研修の機会を提供しています。

平成18年度は、アフリカ向け平和構築分野の地域別研修コースとして、サブサハラ・アフリカ地域「平和構築としてのガバナンス能力強化」を実施しました。このように、平和都市「HIROSHIMA」を生かした研修を積極的に行っています。また、インドネシアとカンボジアを対象にした地方行政支援の2コースを新たに立ち上げるなど、地元自治体のリソースを生かした研修にも取り組んでいます。



サブサハラ・アフリカ地域「平和構築としてのガバナンス能力強化」コースで復興開発の計画策定について話し合う研修員

4月

平成17年度「沿岸漁業の統合的な管理手法」コース継続実施

10月

南西アジア地域「公害防止行政」、カンボジア「地方行政」、イラク「火力発電」、南アフリカ共和国「理数科教員養成者研修」コース開始
研修員、東広島市の「酒まつり」に参加

5月

「廃棄物管理総合技術」、「ガスタービン・蒸気タービン（石炭）火力発電」、「養殖魚の健康と安全管理」、南東欧地域「サポーティングインダストリー育成」コース開始

11月

「社会的環境管理能力の形成と政策評価」、フィリピン「女性起業家育成支援」コース開始

6月

仏語圏アフリカ「教育行政」、ボスニア・ヘルツェゴビナ「平和のための教育ネットワーク構築」コース開始

12月

中南米地域「治安対策強化セミナー」コース開始

7月

「乾燥地水資源の開発と環境評価Ⅱ」、中東地域「上水道維持管理」コース開始

1月

「食品加工・保全技術Ⅲ」、南部アフリカ地域「中小企業育成」、インドネシア「地方自治行政」、サブサハラ・アフリカ地域「平和構築としてのガバナンス能力強化」コース開始

8月

「中等科学教育実技Ⅱ」、中南米地域「生活排水処理計画」コース開始

2月

アフリカ「研究と対話による自立的な基礎教育開発の促進」、ケニア「INSET運営管理」コース開始

9月

「地域観光開発と持続可能な観光振興」コース開始

3月

インドネシア「国際収支・国際経済マネジメント能力強化」、「沿岸漁業の統合的な管理手法」コース開始

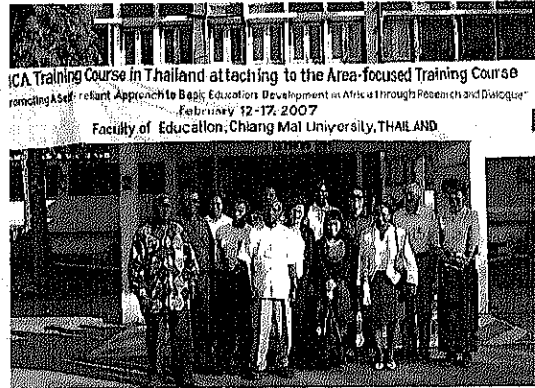
地域別研修アフリカ「研究と対話による 自立的な基礎教育開発の促進」コース

JICA中国では、アフリカの教育行政官と教育分野を研究している高等教育機関の研究者を各国からグループで受け入れており、今回で3年目となります。今年、ブルキナファソ、マダガスカル、ナイジェリア、ザンビアから計12名が参加しました。

この研修コースでは、平成19年2月12日から2月17日まで、タイのチェンマイ大学で基礎教育分野の研究事例を学んだ後、2月18日から3月16日まで約1ヶ月間、広島と東京で研修を実施しました。この研修では、アジアや日本での基礎教育分野の開発経験を共有し、参加しているアフリカの研修員が、国ごとに、自分の国の基礎教育の課題をどのように解決するのか、という調査研究の計画案を作成することを目的としています。具体的には、大学などの高等教育機関が果たすべき役割、日本の教育経験に関する講義、視察、また広島近郊の小学校や中学校への視察を通して、日本の教育開発の取り組みについて幅広く学びました。研修期間中には、アジアとアフリカの大学間の対話、情報共有を目的としたセミナーを3日間実施し、各国の基礎教育分野の課題、取り組みを共有し、活発な意見交換をしました。

研修の最後には、帰国後に調査研究に取り掛かることができるよう、広島大学や国連大学の先生方からのアドバイスを基に、各国研修員が調査研究のテーマと計画を発表しました。

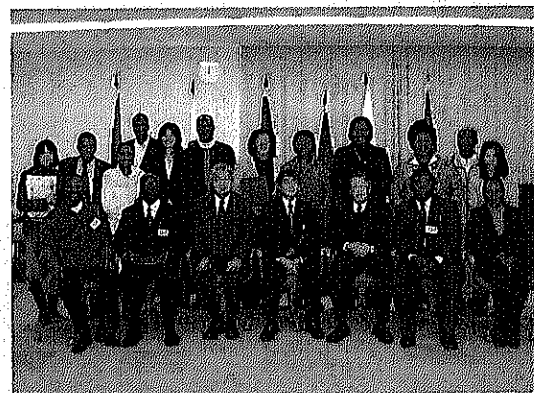
JICAでは、日本に滞在している期間に日本での取り組みについて理解をしてもらうことにとどまらず、帰国後にその成果が広く共有され、活かされるように、帰国後の活動についても支援しています。また、日本の経験や知識を伝えるだけでなく、アジアやアフリカの国の経験を共有し、相互に学びあえるよう関係者のネットワーク構築や、そのネットワークを活用した情報や経験の共有を目指しています。



タイ・チェンマイ大学の前で



熊野中学校で熱心に説明を聞く研修員



研修修了証書を無事手にした研修員

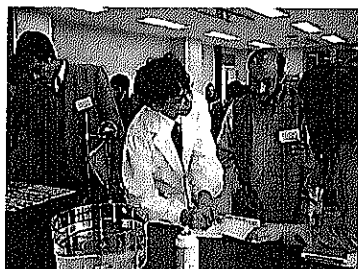
2. 青年招へい事業

開発途上国の将来を担う青年たちを招き、日本の技術を伝え、日本との友情が築かれることを目的としています。青年たちは日本での1ヶ月の滞在の間、自分たちが自国で従事していること（例えば教育、保健医療、環境保全など）について、講義・視察などを通じて学びます。青年招へい事業は、青年たちを受け入れる地域の皆さまによって行われています。日程のうちの「地方プログラム」と呼ばれる約一週間は、日本の文化に触れる、日本を理解するという意味では、一番内容の濃い期間となっています。



折り鶴をささげるパキスタンの青年教員

4月



5月

6月

太平洋混成・経済（中小企業振興）：
世界青年徳山友の会

カンボジア・行政（地方行政）：
国際ネットワークしまね

7月

インドネシア・教育（初中等）：
とっとり青友会

ベトナム・教育（教育行政）：
津山と世界を結ぶ会

8月



9月

10月

11月

タイ・情報技術（IT）：
しょうばら国際交流協会

アフガニスタン・行政（地域開発）：
島根県地域国際交流協会連合会

12月

インド・地域振興（青少年活動）：
財団法人防長青年館

1月

パキスタン・教育（教員養成2）：
社団法人青年海外協力協会中国支部

2月

中央アジア・経済（中小企業振興）：
学校法人広島YMCA学園

3月



※ 国名・分野：地方プログラム受入団体

JICAとともに

世界青年徳山友の会 会長 茅原 正春

「世界の国からコンニチハ！」—この言葉が私たち、世界青年徳山友の会の「テーマドメッセージ」。発足から20年、わずか50名の会員とともに、14年前にJICAという組織も分からないまま始めた青年招へい事業の初めての受入は、1994年太平洋混成公務員グループ24名、キリバスをはじめソロモンなど12ヶ国の南太平洋の皆さまでした。

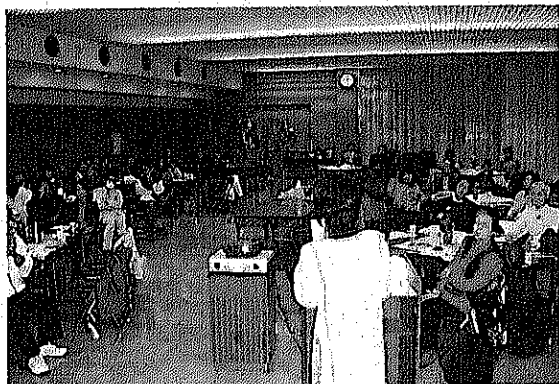
当時、徳山駅に出迎えたホストファミリーや友の会会員、関係者らは南太平洋からの外国人の受入は初めて、ましてや目の当たりにするのは初めて。テレビや本などで見たことはあっても、出会うのは初めてでした。大歓迎と感動の渦。このとき私は、陰ながら思いました。「徳山に、このグループに来てもらって良かった。」それまでは、交流主体の先進国の受入ばかり。今回は違う。発展途上の国「南太平洋諸国」12ヶ国の皆さまの研修と交流のための受入。

この感動とともに9月13日から21日までの8泊9日間の研修と交流は、「アッと言う間の出来事」でした。これを機会に、今までの受入と一味違う感触を得たホストファミリー、会員関係者は、その後、受入が終了と同時に必ず、「次はどここの国と？」「次はどここの国が来るといいですかねー。」と、毎度の会話となる。このような繰返しでパキスタン・中国・アフリカ・モンゴル・再度太平洋混成・インド・フィリピン・3度目の太平洋混成・2度目のフィリピン・3度目のフィリピン・アセアン混成・4度目の太平洋混成、「みんな違って、みんな良かった。」どこかで聞いたような言葉ですが、私達にとっては、ほんとに素晴らしい青年たちとの出会いと思い出を残してくれました。

この14年間、いろんな国、いろんな人々と出会いがありました。そして農業関係・インフラ・経済・教員・環境・福祉・地域振興など、一生懸命に日本の技術を習得しようと頑張る青年たちの姿は、私たちに感動と喜びを与え、お互いに素晴らしい財産を残してくれました。この素晴らしい事業、JICA青年招へい事業でした。

また、14年間の実績としてJICA理事長表彰を頂き、会員や関係者の励みとなりました。国際交流や国際協力に一層力が入り、青年招へい事業で得た経験を基に国際貢献分野に於いても、研修を受け持つことにより豊富な知識を習得することができ、自信を深めることができました。

私たちは、「次のステップに向けて頑張ろう！」そう言う気持ちで一杯です。また明日に向けて、JICA事業を中心とした地方での国際協力・国際貢献そして国際交流を会員関係者で盛り上げていきます。



理事長表彰受賞記念式典での協力隊OBの体験談



ぶどう狩りを楽しむ招へい青年

3. 海外ボランティア事業

JICA中国では、開発途上国の住民と一体となって行う協力活動を志望する個人を募集し、海外に派遣しています。海外ボランティアは大きく分けて、青年（20～39歳）を対象としたものとシニア（40～69歳）を対象としたものがあります。青年海外協力隊事業は、事業を開始して40年を超えました。JICA中国は、毎年2回の募集期に合わせて実施する一般募集説明会の他、帰国隊員の報告会の実施、大学や各種セミナー・イベント等でボランティア事業の紹介を行うなど、ボランティア事業の理解促進のための様々な活動を行っています。

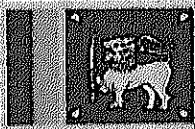


ケニアで原爆展を開催した隊員達
(現地の子供達とオリヅルを折りました)

4月	4/1～5/10 平成18年度春募集、一般募集説明会実施 (14都市、23回) 4/23～5/7 原爆展展示会 (旧日銀広島支店) 【特別説明会】 広島大学体育学科 (4/19、4/24)	10月	10/1～11/10 平成18年度秋募集、一般募集説明会実施 (14都市、23回) 10/19 進路相談カウンセラー会議プレ 会議 【特別説明会】 米子高等技術専門学校 (10/12) 鳥取大学医学部 (10/16) 鳥取大学 (10/13、10/20、10/27) 岡山大学医学部保健学科 (10/20) 山口大学 (10/25)
5月		11月	11/16～17 全国進路相談カウンセラ ー会議
6月	6/4 平成18年度春募集一次選考 (青年海外協力隊) 6/5 岡山県知事帰国表敬 6/8 広島県育てる会総会 6/19～23 出発前表敬 【特別説明会】 広島県立農業技術大学校 (6/6) 島根大学 (6/21) 山口大学 (6/28)	12月	12/12 広島市シニア養成セミナー 12/18～22 出発前表敬 12/23 島根県帰国報告会 【特別説明会】 山口県立農業大学 (12/8)
7月	7/28 原爆展報告会 (JICA広尾) 7/31 鳥取県国際理解教育研修会 【特別説明会】 広島国際学院大学自動車短期大学 (7/10) 広島大学生物生産学科 (7/12) 広島国際大学看護学部・薬学部 (7/22)	1月	1/9 秋募集総括会議 1/24 平成19年春募集広報業務入札公示 1/27 岡山県ボランティア家族連絡会 1/29 東広島市長帰国表敬
8月	8/10-11 ボランティア総括会議 8/21 現職教員特別参加制度事後研修 (帰国報告会) 8/22 秋募集広告業務入札会	2月	2/10 教育セミナー山陽ブース出展 (福山市) 2/12 鳥取県帰国報告会・家族連絡会 2/20 広島県現職教員特別参加制度事前 研修 2/21 平成19年度春募集広報業務入札会 2/24 協力隊を育てる会ブロック会議 (松山市)
9月	9/25～29 出発前表敬 9/30 教育セミナー山陰ブース出展 (松江市)	3月	3/4 広島県ボランティア家族連絡会 3/18 山口県ボランティア家族連絡会 3/19～23 出発前表敬

「海外からこんにちは！」

～世界で活躍したボランティアから、お便りが届きました！～



小林 麻衣子

派遣国：スリランカ民主社会主義共和国
派遣期間：2005年4月～2007年4月
職種：村落開発普及員
出身：岡山県

1. どんな活動をしていましたか？

村落開発普及員として都市貧困層の生活環境改善プロジェクトに配属されていました。大規模な運河の改修に伴う周辺住民の移転と生活環境の向上と安定を目的としたプロジェクトで、住民のニーズを吸い上げ、プロジェクト側に伝え、円滑にプロジェクトが進むサポートをしていました。

2. 活動上、苦勞したことはありますか？

改修工事に伴う移転で住民が家を建てるのですが、そんなこととは無縁だった彼らにとっては難しいことだらけ。でも、それは私にとっても同じで、住民が困っていること（技術的、金銭的なこと）に答えられないとき、どうしようもなく心が痛みました。

3. 活動上、うれしかったことはありますか？

サイトの住民のおばあちゃんに「ミス（わたしのこと）がくると、お腹がいっぱいになるよ。」と言われたこと。社会の最貧困層に属する彼らにとって、お腹がいっぱいになるということは何よりも幸せの象徴なのだそうです。

4. ボランティアを目指す人に一言お願いします。

こちらが何かをしてあげるのではなく、現地の人と一緒に何かをすることで自分が成長できる機会だと思います。現地の人と築き上げたものは、最高の思い出になるはずです。



<結婚式>



桐田 晃

派遣国：ウガンダ共和国
派遣期間：2005年4月～2007年4月
職種：理数科教師
出身：島根県

1. どんな活動をしていましたか？

小学校の教員を目指す若者に、物理と数学を教えていました。

2. 活動上、苦勞したことはありますか？

ウガンダに限らずアフリカの理数科目のレベルは決して高くなく、これから教師になる彼らのレベルも決して教師としてふさわしいとはいえませんでした。理数科嫌いの先生が、理数科嫌いの子供を生み出す悪循環に苦勞しました。

3. 活動上、うれしかったことはありますか？

授業中「もっと、教えてくれ！ 続けてくれ！」と声が上がった時は、大変うれしかったです。

4. ボランティアを目指す人に一言お願いします。

「国際協力」とか「ボランティア」とか、あまり大上段に構えないのが私のモットーです。結果的に相手国になんらかのプラス要素を残すことができれば（もちろん自分自身にもプラスの経験となれば）、いいのではないのでしょうか。



<ウガンダの若者とスポーツで汗を流す>

※JICA中国のHPにも、現在活動中のボランティアからの便りを、たくさん掲載しております。
こちらをご覧ください→<http://www.jica.go.jp/branch/cic/pages/volunteers/index.html>

4. 草の根技術協力事業

草の根技術協力事業は、国際協力の意思をもっている日本のNGO、大学、地方自治体及び公益法人などの団体からの提案を受け、開発途上国への国際協力活動について、JICAがNGOなどの団体との共同事業として実施するものです。協力期間は、3年以内（但し、地域提案型は3年度内）です。団体の規模や種類に応じ、次の3種類の事業形態があります。

●草の根協力支援型

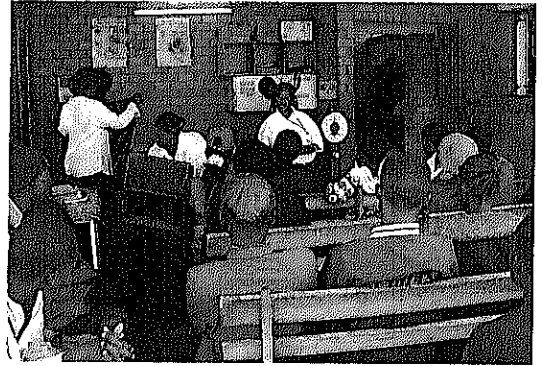
国内での活動実績はあるものの、開発途上国への支援実績が少ないNGOなどの小規模な団体向けです。

●草の根パートナー型

開発途上国への一定の支援実績を有しているNGOなどの団体が、これまでの活動を通じて蓄積した経験や技術に基づいて提案・実施するものです。

●地域提案型

地方自治体からの事業提案により、日本の地域社会が持つノウハウ・経験を活かし、現地での技術指導や開発途上国からの人材の受け入れを通して、途上国の人々や地域の発展に役立つ協力活動を支援するものです。



保健教育をおこなう結核治療サポーターと、参加した地域住民（ザンビア・ルサカ市非計画居住地区結核対策プロジェクト）

4月

●草の根協力支援型案件随時募集

- 以下継続案件の実施契約締結
- 「ミャンマー・コーカン特別地域プライマリーヘルスケアプロジェクト」（パートナー型）
 - 「スリランカ・ワウニア地区基礎保健サービス復興支援事業」（パートナー型）
 - 「ザンビア・ルサカ市非計画居住地区結核対策プロジェクト」（パートナー型）
 - 「中華人民共和国・岡山ー上海高齢者介護教員養成センター」（パートナー型）
 - 「カンボジア・小学校体育科指導書作成支援プロジェクト」（パートナー型）
 - 「パラオ共和国・パラオ共和国での学校検診実施のための技術協力」（支援型）
- 新規案件
- 「インドネシア・エンレカン県酪農研修センター運営支援プロジェクト」（支援型）

8月

●地域提案型募集開始

9月

- 地域提案型募集締切
- 草の根パートナー型第1回採択内定案件決定
- 「中華人民共和国・重慶市との環境保全交流事業」（提案型）契約締結

10月

- 「中華人民共和国・日中療育技術交流事業」（提案型）契約締結

11月

●草の根パートナー型第2回募集締切

12月

●地域提案型採択内定案件決定

1月

- 草の根パートナー型第2回採択内定案件決定
- 「中華人民共和国・威海市個別研修環境保全パートナーシップコース」（提案型）契約締結

2月

5月

6月

7月

- 「カンボジア・元気な学校プロジェクト」（提案型）契約締結

●草の根パートナー型第1回募集締切

3月

草の根パートナー型
「岡山—上海高齢者介護教員養成センター」
社会福祉法人 旭川荘 常務理事 板野 美佐子

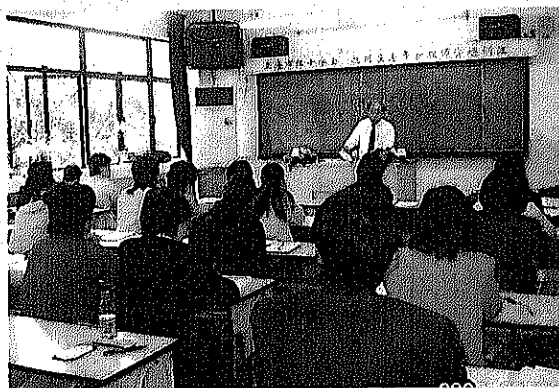
社会福祉法人旭川荘は、これまで交流のあった中国・上海市を拠点として、2004年から高齢者介護教員養成を行っている。2005年からは、JICAの草の根パートナー型として支援を受け、旭川荘と上海市紅十字会との三者で進めている。養成された教員が高齢者介護従事者の養成に携わる仕組みをつくり、上海市を拠点として内陸部へと高齢者介護の専門職の裾野を広げていくことが、この事業の目的である。

現在、上海市の人口は約1,700万人。その内60歳以上の高齢化率は20%であり、高齢者介護は喫緊の課題である。

旭川荘では、26年前より中国から医療福祉を学ぶ研修生、視察団を約1,000名受け入れてきた。旭川荘からも、中国へ福祉の翼として、また福祉セミナー、ホームヘルパー養成などを目的とし、約1,000名が上海市を訪問している。中国よりも先に高齢社会を迎え、高齢者介護の専門職養成の実績を持つ旭川荘が、上海市から人材育成の要請を受けた。

この事業の人材育成の仕組みは、①上海市交通大学医学部を会場に介護の基礎を座学で習得する基礎講座、②日本に来て介護の実際を学ぶ実習講座、③再び上海におけるまとめのフォローアップ講座の3段階で、1年目にまず教員20名を養成し、その養成された教員が直接介護を行う介護従事者30名を年2回、延60名養成する。これを繰り返して4年目の今年で教員81名、介護従事者180名を養成している。そのうち江西省からは、教員養成講座に10名、介護従事者講座に124名、合わせて134名が2007年度までに参加することになる。

基礎講座では旭川荘から15名の講師陣がプログラムにしたがって順々に上海を訪問し、介護概論、老人福祉論、高齢者の医学、高齢者の心理、介護技術などの講座科目を社会的、文化的、歴史的背景を考慮しながら、介護に携わる人達に対して専門的な知識や技術を提供した。



上海での基礎講座の様子

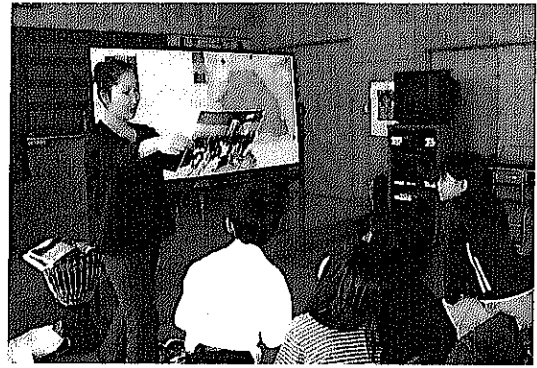


日本での実習講座（介護演習）にとり組む参加者







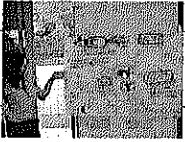
5. 開発教育支援・市民参加協力推進事業

もっと、国際協力を身近に感じて欲しい！
開発途上国について知って欲しい！

JICA中国では、これまでの国際協力活動を通して蓄積してきた開発途上国や国際協力に関する様々な情報や経験を、学校や地域社会に還元しています。海外で活躍した青年海外協力隊員による出前講座や海外研修員の学校訪問など、楽しく参加して、たくさん学べる機会をご用意しています。皆さん、奮ってお申込み・参加ください。



国際協力出前講座（写真を使って派遣国の様子を話をしています）

日程	市民参加協力推進事業	教師海外研修	国際理解教育研修会	研修員の学校訪問	高校生国際協力体験プログラム	国際協力中学生・高校生エッセイコンテスト
4月		募集 4/21 応募締切	募集	募集 4/26 応募締切		
5月		5/27-28 第1次派遣前研修	5/12 第1次締切 5/27 第1回研修会		募集	
6月		6/17-18 第2次派遣前研修				6/1 募集開始
7月	平成18年度市民参加協力推進事業 随時実施	7/29-8/12 海外研修	募集		7/7 応募締切 7/14 決定通知	募集
8月					8/17-19 実施	
9月		9/4 研修報告書提出締切	9/8 第2次締切		9/29 プログラム後のレポート/エッセイコンテストのゴビー提出締切	9/22 募集締切
10月		9/30-10/1 第1次帰国後研修	9/30-10/1 第2回研修会			
11月			募集			
12月		12/25 実践報告書提出締切				
1月		1/27 第2次帰国後研修	1/12 第3次締切 1/27 第3回研修会			1/12 入賞者発表
2月						
3月						3/18 表彰式(JICA中国)
視聴覚資料の貸し出し		JICA中国施設見学		国際協力出前講座		
随時申込受付・実施						

詳細は、JICA中国HPをご参照ください。

JICA開発教育支援事業を活用して 出前講座の活用事例

八頭町立八東中学校 教諭 中村 明彦

前任校の八頭町立中央中学校で、私は3年程前からJICAの出前講座をお願いしてきました。昨年度は、1年生で『世界がもし100人の村だったら』と青年海外協力隊員の方の帰国報告を、2年生で『フォトランゲージ』を、3年生で『新貿易ゲーム』を行いました。その中で、体育館を使って1年生全員（115人）で行った『100人村』の生徒の感想を紹介します。

- 今日の学習で一番印象に残ったことは、“もし世界が115人だったら、その中の10人くらいは文字が読めない人だ”、ということを知ってとてもビックリしました。それに、富（アメ）もアフリカは12人で1個だったのに、日本は3人で33個でした。世界が不平等だということが、すごく分かりました。（女子生徒）
- 一番僕が心に残ったのは、「言葉がしゃべれなかったら、分からなかったら」で、本当に言葉は大事だと授業で実感した。この授業で花岡さんが教えてくれたことがとてもいい経験になったし、ゲームっぽくてとてもとても楽しかった。帰ったら、家族のみんなに授業でやったことを報告したい。（男子生徒）

生徒は、日本は豊かな国であり、文字が読めることを当たり前を感じています。しかし、それが世界の中では、いかに恵まれた状況であるかを、この出前講座のシミュレーションによって感じる事ができたようです。100人を越える大勢の生徒で、ファシリテーターをしていたJICA国際協力推進員の花岡さんにはご苦勞をお掛けしましたが、視覚的な効果が大きくなり、とても良かったです。



「世界がもし100人の村だったら」を体験中

社会科の先生にも協力してもらい、学級単位で行った3年生の『貿易ゲーム』でも、「貿易によって成り立っていく国の仕組みがよく分かった」「他国と協力することが大切だと思った」「貧しい国々に援助することも必要だと思った」「どの国も平等ではなく、有利な国や不利な国があることがよく分かった」など、シミュレーションを通して、世界の縮図を実感できたことが大きかったようです。

いずれの場合も、青年海外協力隊員の経験がある国際協力推進員の花岡さんだからこそ、生徒へのアドバイスやまとめの話に説得力があり、生徒にとって印象深かったようです。新しい学校に異動しましたが、これからもJICAの出前講座を活用させていただいて、国際理解教育に取り組んでいきたいと思ひます。

「世界の子どもの絵画展を実施して」

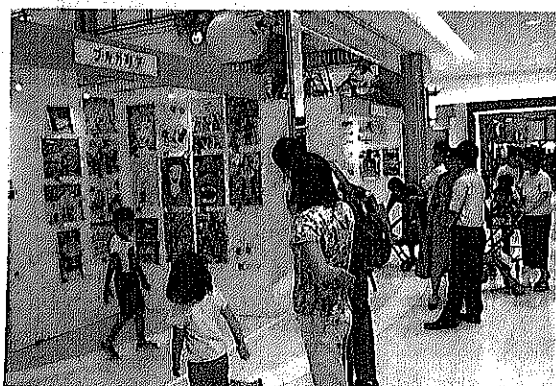
岡山県企画振興部国際課 主任 唐下 英二

岡山県では、毎年10月を「おかやま国際貢献月間」と定め、国際貢献活動に関連する様々な事業を実施しています。そのオープニング・イベントとして、平成18年10月1日(日)・2日(月)、イオン倉敷ショッピングセンター内において、「世界の子どもの絵画展」を初めて開催しました。

絵画展では、岡山県出身のJICAボランティアである「おかやま国際協力大使」のうち6名と連携して、日本では小中学生にあたる年代の子どもたち約300人に描いたもらった絵を展示しました。JICAボランティアの活動紹介や県内NGOのブースなども設けました。会場が大規模商業施設内であったこともあり、多くの方に来場いただくことができました。

絵のテーマは「私の国」でした。各国の子どもたちが自分の住む国の何をどのように見つめて描くのか、それが日本人にどのように伝わるか、非常に興味深いものがありました。初めてこのような絵を描いた、という子どもたちも多くいたようですし、技術的なレベルは日本の同世代の子どもとは異なるかも知れません。しかし、自分が住んでる街並みの様子、自然や野生動物のいる風景などが並んだ会場では、「生活がよくわかるすてきな絵でした」「躍動感があふれる絵で元気が出ます」などの声が多く聞かれ、各国の子どもたちの視線が純粋に反映された絵は、間違いなく来場者の心に深く響いたようです。

次年度も絵画展を開催する予定です。日本の子どもたちの描いた絵を彼らが見たら、日本という国をどのように感じてくれるのか？ 今後はそのような機会を設けてもよいのでは、と感じています。



各国から届いた「私の国」の絵画を興味深く鑑賞中の来場者

6. 大学との連携協力

援助リソースとしての大学

大学は、JICAが実施する開発援助の豊富なリソース（人材、技術・情報、研修施設等の資源）として、これまで大きな役割を果たしてきました。国際協力の対象は、広範且つ多様になってきております。JICA中国は、各大学の特色・優位性を活かした連携活動を行っています。



山口大学連携講座「国際協力論」の受講者

連携のメリット

JICAは、大学との連携強化によって、国際協力事業の質の向上を図ることができます。また、地元幅広いネットワークと影響力を持つ大学と連携することによって、地域でのJICA事業の理解と協力を推進できます。一方、大学側には、研究フィールドの拡充、国際協力の現場を教育の場として活用するなど、国際化促進のメリットがあります。

JICA中国による大学との連携事業

JICA中国の主な業務は、海外からの研修員の受入と市民参加協力の実施です。後者は、青年海外協力隊等ボランティアの海外派遣、地域NGOによる海外での草の根技術協力実施の支援、学生等を対象とする開発教育（国際理解教育）支援です。下表は、これらの業務での大学連携協力の平成18年度の実績です。大学は、国際協力人材の育成拠点としても期待されます。

JICA中国による大学連携実績（平成18年度）

事業区分	連携先大学	連携内容
研修員の受入	広島大学、県立広島大学、鳥取大学、水産大学校、岡山大学、加計学園倉敷芸術科学大学	海外研修員の受入
青年海外協力隊	広島大学	派遣隊員の単位認定
	広島大学	推薦入学制度の適用
	鳥取大学、島根大学、岡山大学、山口県立農業大学校、広島大学、広島県立農業技術大学校、山口大学、広島国際大学、広島国際学院大学	特別説明会による募集
開発教育支援	鳥取大学、広島女学院大学、山口大学、広島大学、広島文教女子大学、山口県立大学、川崎医療福祉大学、天理大学、広島市立大学、広島修道大学、岡山大学、県立広島大学、ノートルダム清心女子大学	出前講座の実施
	鳥取大学、山口大学、近畿大学、広島修道大学、広島経済大学	市民講座、講演の実施
	広島大学、広島国際大学	JICA中国施設の見学
連携講座	山口大学	「国際協力論」授業への講師派遣
包括連携協力	広島大学、山口大学	協定書・覚書に基づく協力

JICA中国・山口大学連携講座「国際協力論」

山口大学経済学部 教授 今津 武

JICA中国と山口大学経済学部、教育学部は、平成18年3月に包括連携協力覚書に署名しました。同覚書に基づく協力事業第1弾として、山口大学経済学部でJICA協力授業「国際協力論」を開講（4月～7月）しました。本授業は、(1)世界の「貧困問題」についてその現状を理解すること、(2)世界の貧困の原因を議論し、そのことが私たち日本をはじめとする先進国に及ぼす影響を学習することを目標としました。15回の授業のうち5回をJICA中国からの派遣講師に担当していただき、その授業内容は下表の通りでした。

講義内容	担 当
国際協力機構（JICA）の歩みと役割	宿野部 雅美（JICA中国）
技術協力の内容と課題	宇佐見 晃一（元バングラデシュ専門家）
JICA国内事業とパートナー・シップ （自治体、NGO、大学の役割）	辻野 博司（JICA中国）
国際協力の現場から	岩崎 薫（JICA中国）
青年海外協力隊経験者からの活動報告	水野 雅子（元インドネシア青年海外協力隊員）

学生達からは、「JICAについて詳しく知ることが出来てよかった。先進国に住む1人として、途上国支援などにいろいろ協力したいと思った。」「山口大学の授業で、現場の仕事（JICA）の内容を話されたことは大変良い刺激になったと思います。」「国際協力の現場の苦勞がよく解りました。」「私たちがどれだけモノを贅沢に使用しているのかと思った。少しでもモノを大切に使用するようし、途上国の人々のためにボランティアをしたい。」などの意見が寄せられ、途上国への理解を深め、自分たちの豊かさに感謝し、何らかの形で開発途上国のために協力したいとの意識を芽生えさせることができたと評価しています。

この授業は「開放授業」として学外にも開放され、7名の社会人の方が受講されました。また外務省から派遣いただいた川村真紀さんによる「日本外交とODA」の講義も組み込みましたが、その様子は外務省ホーム・ページに掲載されています。



インドネシアでの隊員活動を紹介する水野講師



シニア世代も「開放授業」に熱心に参加